昭和２年ウィンネッケ彗星に伴う流星群。朝鮮総督府観測所の報告

豆田勝彦

１、初めに

京都大学に保管された、山本一清博士の残された大量の資料の中に、昭和 2 年のポン、ウィネッケ彗星に伴う流星群の記録を見つけた。流星観測者には 6 月の牛飼い群として知られる流星群であるが、この昭和 2 年の出現を最後に明確な出現が認められず。流星界では幻の流星群とすら呼ばれていた。1998 年に突然に出現し,その後 2004 年の出現が予報され出現が認められ注目の流星群となった。80 年以上の時を超えて姿を現した、朝鮮総督府の資料をここに紹介したい。

２、報告の概要

観測報告は、昭和２年（1927 年）8 月 5 日　朝鮮総督府から山本一清博士に、観測依頼に対しての報告とされ、「観測第 125 号」として公文書の形式で送られた。

6 月 25 日から 7 月 3 日、9 日間の報告で、374 個の流星を星図に記録し、流星についての情報は、明るさ、速度、性状、その他である。報告には、

「6 月 25 日より 7 月 3 日に至る。時恰も濃霧季に当りたる為充分なる観測を遂げること能わさりしが常所に於いて行い観測は、観測所内の一部に天幕を張り、幕内には臨時電灯を設備、テーブル、椅子、記録表、星座記入図、双眼鏡、時辰儀を備えつけ。芝生上の数カ所に、防寒寝具また長イスにて徹夜観測。

流星出現を記録係に瞬時に指示。一秒以内の誤差に読み取り得る。毎夜四人及び五人、三組を以て交互に、６月 25 日から７月３日。9 日間。３７４個流星を記録。」

（原文は漢字とかたかなであるが、豆田の独断で上記の表記とした。一部省略箇所もある）

9 日間、例え空が曇っていても観測は続行され、夜空を見続けていたことが伺える。観測条件の良い、6 月 30 日、7 月 2 日、7 月 3 日の観測記録が青焼きの星図と共に送られてきている。観測された流星数以下のとうり

６月２５－２６日　　5 個
６月２６－２７日　　20 個
６月２７－２８日　　17 個
６月２８―２９日　　32 個
６月２９－３０日　　欠測
６月３０－１日　　70 個
７月　１－2 日　　9 個
７月　２－3 日　　155 個
７月　３－4 日　　66 個

なお、ウィンネッケ彗星を望遠鏡の設備がないものの、双眼鏡と肉眼で観測され、７月１日に「満月状のものが、淡雲にて包まれたの如く、稍黄色を呈し、ボンヤリしたるものにして、光度は四等星程度なり。」と報告されている。この他 6 月 21 日、25 日、29 日も見

えていたこと記されている。

３、観測報告

1927 年 6 月 30 日/7 月 1 日

七田、金、景浦、東　技手

赤星、山田　助手

時間	流星数	群流星	雲量	その他
20:00-21:30	天候悪い			
21:30-22:00	9	2(0)	1	
22:00-23:00	30	4(2)	0.5	22:30-23:00　雲量 1
23:00-24:00	13	3(1)	3	22:30-45 雲量 8-10
24:00-24:45?	18	1(2)	1	24:30 雲量 4.濃霧
25:00-29:00*	全天霧に覆われ観測不能			

（29:00 は 28:00 の誤植か？）群流星（　）は不確実なもの。

7 月 2 日/3 日

伊藤、前田、鳥越　技手

宮久、丁　助手

時間	流星数	群流星	雲量	その他
21:00-22:00	11	2(1)	1	
22:00-23:00	17	0(1)	0	
23:00-24:00	23	2(3)	0	
24:00-25:00	33	1(2)	0	
25:00-26:00	24	3(1)	0	
26:00-27:00	23	0(2)	0	
27:00-28:00	24	0(0)	1	27;45-28:00 雲量 2

7 月 3 日/4 日

七田、金、景浦、東　技手

赤星、山田　助手

時間	流星数	群流星	雲量	その他
20:00-21:00	2	1(0)	10-7	
21:30-22:00	6	0(1)	7	
22:00-23:00	9	2(0)	5-7	
23:00-24:00	12	0(0)	5-4	
24:00-25:00	28	0(0)	4-1	

25:00-26:00	6	0(0)	1-10
26:00-27:00	3	0(0)	9-10
27:00-28:00	全天霧観測不能		

群流星は記録された星図より、流星群の放射点から豆田が判定した、方向と速度を重視しやや辛めの判定を行なった。群流星横の（　）の数字は群流星と判定してもよかったが、疑問もあり群とは決定しなかった。

6 月 30 日夜がピークに近いと推定できる、霧に観測を邪魔されながらも群流星の出現を確実に捉えた観測と認定できる。なお明るい群流星の性状として、「光芒を曳き暫時残光を認めたるものあり」と特記され、特に 3 日午後 10 時 19 分に出現した金星大の群流星は素晴らしかったと思われる。性状は 2004 年に観測した筆者と同じくするもので、今回の群判定の根拠とした。

４、報告の意義

今回、山本一清博士の資料にある報告については、昭和 2 年 9 月 1 日発行の「科学画報九月、宇宙及び天体号」（科学画報社）にある山本一清博士の「ウィンネッケ彗星の観測結果総勘定」に触れられていない。これは報告が 8 月 5 日に博士宛へ送付されていることから当然のことと思われる。次に「流星の研究」（小槙孝二郎　恒星社 1935 年）P52 にある「比較的天候にめぐまれた朝鮮仁川測候所に於ける観測は、六月三十日に極大を示し、毎時平均五個位見られたことを報じている。」とある。また山本一清資料に古い新聞の記事があり、それによると「ウインネツケ彗星から七十二個の流星　仁川気象観測所で発見」とあり。この記述から朝鮮総督府観測所は仁川にあったことが伺える、ただし毎時平均 5 個の記述については今回報告の記録からは、疑問と言える。小槙氏はこの報告を実際にはご覧にならなかったのではないか？

1927 年のこの報告は私の知る限りこれまで公表されていなかった可能性が高い。観測所の業として行われたこの観測の報告は、80 年の時を経て初めて明らかになったように思う。熱心な観測そして記録された当時の観測者に敬意をはらいたい。